# 小学部四年Ｂ組

## 走りまくった運動会

鵜飼　桜子

わたしは一年生からほ習校の運動会に参加していますが、毎年負け続け、一度も勝ったことがありません。そのため今年こそは「ぜったいゆう勝する」という強い思いで運動会に参加しました。今年は去年と同じように白組になりました。四年生が行う競ぎ、「デカパンゴーゴー」は男女が、せなか合わせでスタート位置につき、グラウンドを反対方向に走り出します。そして合流後、男女でデカパンをはきゴールを目指します。「一位になれるか」「少なくとも最下位にはなりたくない」そういう思いできんちょうしながら四年生の番になるのを待っていました。正直、男女でデカパンは、はきたくなかったので、この競ぎはあんまり乗り気ではありませんでしたが、体を動かすのは好きなのでとにかく一位ねらいで行きました。

一レース目は、見事に一位をとることができました。続いて二レース目です。一レース目の走り始め数秒後にリードできていたのが、二レース目でも勝てるかもしれないという自信につながりました。一位を一回取って二回目の走りの番を待っていた時はもう、「ぜったい一位は取れる」と調子に乗っていました。しかし、走り始めたときにリードはできていたものの、一回目よりは差がなかったので「もっと本気で走らなきゃ負けるかもしれない」とあせりました。そのため、一回目より全力で走ったので一位になれましたが、あの時気をぬいていたら一位にはなれなかったと思いました。一位でゴールテープを切り、息切れしながらも一位の列にならんだときには、望んでいた一位が二回も取れたので大満足でした。

一度も勝ったことがない運動会で、今年も全力で走ったり、つなをひっぱたりしましたが、今までと同じように負けてしまいました。ゆう勝できなかったのもくやしかったですが、何より一番楽しみにしていたつな引きの競ぎで勝てなかったのが一番くやしかったです。しかし、デカパンの競ぎで一回目も二回目も一番でゴールにたどり着けたよろこびはくやしさより上だったと思います。

## 初めてのほ習校運動会

江花　けい太

雨がふってきてしまいそうで少し心配でしたが、すごしやすいとてもいい日、待ちに待った運動会がありました。練習で運動会の流れがなんとなくわかったので不安はなく、校庭になびくはたを見ていると、早く運動会が始まらないかなとわくわくしていました。

一番心に残っているのはつな引きです。一回戦目、思い切り引きましたが負けてしまいました。そして「くやしい」と思いました。二回戦目こそはと、みんなで「オーエス」と声を出し、タイミングを合わせて引きました。手のひらがいたかったけれど、がんばって引きました。しかしやっぱり負けてしまいました。来年は負けないぞと思いました。

つな引きは負けてしまったけれど、それ以外にも心に残ったことがありました。他の学年の足がとても速くてびっくりしたり、大きな声でおうえんしたりしました。用具係の人たちが、物を運んでいるのを見て、みんなで運動会を作っているんだなと感じました。

運動会が終わったときは、くやしい気持ちもあったけれど、楽しかった気持ちのほうが大きかったです。みんなと力を合わせることの大

切さを、つな引きから学ぶことができました。来年はつな引きをもっと練習したいです。

## 運動会の感想

杉山　駿輔

十一月一日に、日本語ほ習校で運動会がありました。運動会の日は、くもりで、少し雨が降りましたが、無事終わらせられました。ぼくの時間の運動会の種目は、大玉おくり、つな引き、リレー、学年個別種目でした。運動会は、ようち部と一～三年生、四～六年生と中高生の二部に分かれて行われました。

ぼくが印しょうに残った競ぎは、つな引きです。なぜなら、つな引きは、みんなでタイミングを合わせてつなを引くため、みんなの息が合わないと勝てないからです。また、ぼくの学年は、列の一番最初の方にいるため、かなりきんちょうしました。

さらに、『一回戦が終わると赤組と白組で場所を入れかえ、二回戦を行う』というルールもあったりしたため、ぼくはつな引きが運動の中で一番印しょうに残りました。

ぼくが、競ぎ以外で印しょうに残ったことは、二つあります。一つ目は、おうえんです。ぼくの学年の赤組の男子は、とても大きな声でおうえんをしていたので、印しょうに残りました。二つ目は、校長先生のあいさつです。校長先生がおもしろいあいさつをインターネットでさがしていると、『ギャル語で話す』という方法を見つけたらしく、それを閉会式でじっせんしてくれました。すると、とても面白く、大ばく笑していたことが印しょうに残りました。

今年の高学年の運動会は、赤組が勝ちました。ぼくは、赤組に入っていたので、勝ててうれしかったです。また、ぼくは今年の二月からほ習校に通い始め、まだほ習校で運動会をやっていませんでした。なので、初めて運動会をして、とてももり上がったので、また来年も元気で楽しく、運動会をしたいなと思いました。

## 全力を出し切ろう

栗田　華名

十一月一日に運動会が行われました。ドキドキのきんちょうとわくわくの楽しみでいっぱいでした。

四年生が行う競ぎは、デカパンゴーゴーでした。あと少しで自分の番というときになると、もしうまく走れなかったらどうしよう、ちゃんとパンツをはけなかったらどうしようなど、いろいろな心配がどっとあふれてきました。そして、この心配な思いはどんどん大きくなっていきました。しかし、友達も心配しているのを見て少し安心しました。だんだん列が短くなっていって「ピーッ」というかん高い音が近づいてきました。やっと自分の番になると、「よーい、ドン」の合図で走り出しました。四位だったけれど、がんばれたのでうれしかったです。

四、五と六年生でやるつな引きもはく力がありました。みんなでチームワークができたような気がします。二回とも紅組が勝てました。つなを引いているときは、かけ声があがって「オーエス・オーエス」とみんなで必死に引っぱっていました。終わったあとは手が赤くヒリヒリしていましたが、がんばったしょうこに見えました。

最終結果では、紅組が勝ちました。発表の時、一気にもり上がった紅組の様子はわすれられません。勝てなかった白組はとてもくやしそうでした。

来年も、みんなで力を合わせて全力を出し切り、ひとつになって運動会に取り組みたいです。

## 三回目の運動会

木村　紗弥

十一月一日、運動会がありました。わたしは今年、運動会に出るのは三回目です。一回目は日本の小学校、二回目はげん地校、そして三回目が今回のほ習校の運動会です。まさか一年に三回も運動会に出るとは思っていませんでした。

わたしは今回三つの競ぎに出ました。一つ目はデカパンリレーです。デカパンをはくのに時間がかかったけど、友達と協力して一位を取ることができました。出番が終わったので安心してすわっていると、とつ然先生に

「もう一回走って！！」

と言われ、もう一度走ることになりました。二回目も一位を取ることができて、最高の気分でした。

次の競ぎは四・五・六年生で行うつな引きです。二回戦って両方とも負けてしまったけど、ちがう学年の人たちと協力して戦うことができました。

わたしはこの運動会で友達と協力する大切さを学びました。競ぎもおうえんもみんなでがんばることができました。わたしにとって三回目の運動会もわすれられない一日になりました。

## 空母レキシントンについて

飯澤　颯太

ぼくは、去年コーパスクリスティーに行った時、空母レキシントンに行きました。なので今日はレキシントンとは何なのかを説明していきます。

レキシントンとは第二次世界大戦中に太平洋で日本と戦った空母です。レキシントンは今は博物館になっていて中を自由に見学できます。レキシントンの上は十機ぐらいの戦とう機が展示されていました。戦とう機にはミサイルがついていて、ぼくの身長と同じくらいの高さでびっくりしました。「こんなものが日本に落ちたのか」と思いました。レキシントンの中には美よう室や歯医者や教会などがあってまるで一つの町の様でした。一番下の階にはエンジンルームがあってボイラーなどの大きな機械がたくさんありました。

ぼくはレキシントンを見学して、日本の当時のまずしい生活とくらべてアメリカの生活はじゅう実していると感じました。また、つかまえた日本兵を入れるおりや、特こう隊が突っ込んだあとをみて、ふくざつな気持ちになりました。もう戦争をどこもしてほしくないと思いました。このようにレキシントンに行くといろいろなことが学べます。みなさんも行ってみてください。

## 戦争についてわたしが考えたこと

金田　莉菜

戦争は、人々がたくさんなくなってしまうので、とても心がいたくなります。

昔、日本は石油をもとめて、ハワイの真じゅわんをこうげきしました。そしてアメリカは、東京や大阪などにこうげきし、一九四五年の八月、広島や長崎に原子ばくだんを落としました。

地方の方が安全なので、そ開する子どもや老人もいました。学童そ開は、児童が親元をはなれ、先生につれられて地方へ行き、寺や旅館などでくらしていました。戦争は三年九ヶ月つづきました。この日本とアメリカとの戦争を太平洋戦争といいます。この戦争では、およそ三百十万人もの人がなくなりました。戦争が終わった後も人々はとて

もまずしく、食べ物も少ししかもらえませんでした。
　わたしは、戦争をけい験したことが一度もありませんが、戦争をしたくありません。わたしの家がある大阪府も、空しゅうをうけていたと知っておどろきました。そ開も住んでいる場所や親元からはなれなければいけないことがとても残念で、とてもさびしいと思います。人々がたくさんなくなってしまうのも本当に悲しいです。これからわたしは戦争をしないで平和にくらしていきたいです。

## 戦争のつらさと向き合って

藤解　峻平

「戦争はこわいと思いますか。」
ぼくは、こわいとい思います。なぜなら、昭和時代前期の日本のれきしについての本を読んだからです。本には、なぜ戦争が起きたか書かれていました。一番の原因は、日本は石油がとれないので、石油が不足したことです。しげんだけのために、たくさんの人々がぎせいになったことにおどろきました。
　本には、原ばくの事も書いてありました。原ばくは、ばく発だけではなく、放しゃ線で後から、ガンや病気になる事をあらためて知り、おそろしいと思いました。さらに、回天（かいてん）と言う魚雷（ぎょらい）に人を乗せ、てきに体当たりして、乗客ごとばくはさせるという兵器のことも書かれていました。ぼくは、回天という兵器で、人間をこれほどまで、ひどいあつかいをしていたことに、ぞっとしました。
　それから、食料がほぼ兵器のところに行き、日本国民への食料は、大根の煮物だけだったことも書かれていました。また、動物を兵隊の服のためにわたさなければなりませんでした。このことから、ぼくは、戦争は、生活にも、大きく関係することを知りました。
　ぼくの今の生活とくらべたら、大きくちがいます。ぼくは、今の生活をあたり前のように感じていましたが、戦争のことを知り、戦争中の人々は、この生活をしたいけれど、できなかったと思います。
　今も、戦争は、つづいています。原ばくも多くの国が持っています。けれど、しげんやしゅう教のことで、戦争を起こさないでほしいです。原ばくもこの世からなくなってほしいです。

## 広島の原ばく

岡内　翔梧

なぜ原ばくについて書こうと思ったのかというと、おじいちゃんとおばあちゃんが広島に住んでいて、三年前に原ばくドームや平和記念公園に行った事があるからです。また、ひいおじいちゃん、ひいおばあちゃんのおはかに行った時、周りのおはかに「原ばくにより死ぼう」と書いてあり、その時少し戦争や原ばくの話を聞いたからです。
　原ばくは、一九四五年八月六日に投下されました。原ばくとは、原子かくの分れつによって発生するエネルギーを兵器として利用したものです。なぜ広島に落とされたかというと、アメリカは日本に早くこうふくしてもらうため、そして軍たいの重要な場所があったためです。ひ害は十四万人。熱線でばく心地付近の温度は三千度から四千度にもなりました。熱線をあびた人は、そのしゅん間か数日のうちに死ぼうしました。その後病気になり、歯ぐきから血が出たりかみの毛がぬけたりしました。ぼくは、その写真がこわくてあまり見ることができませんでした。
　原ばくドームに行った時、ママからこの下の川にたくさんの人がにげるように泳いでいたけど、ほとんどの人が死んでしまったと聞きました。ぼくは、このテキサスでも暑いのに、火をあびたような熱さは想ぞうがつきませんでした。人や鉄が一しゅんでとけるなんてこわす

ぎます。
　かくを持っている国があります。もしそれがまた使われたらと思うとこわくてたまりません、戦争なんて良い事はないんだと強く思いました。

## 「一つの花」を読んで

ホルトン　タイタス

　ぼくは、ほ習校のじゅ業で、「一つの花」のお話を読みました。このお話は、戦争のお話です。戦争とは、国と国が、ぶ器を使って争う事です。人がけんかをするのと同じように、国と国も、意見が合わなかったり、ほしいものが同じだったりすると、争ってしまうことがあります。
　このお話には、ゆみ子という女の子が出てきます。ゆみ子はまだ小さくて、戦争でみんな食べ物がないということが分かりませんでした。なので、いつもおなかがすくと食べ物を「ひとつだけちょうだい。」と言うことが口グセになっていました。
　ある日、ゆみ子のお父さんが戦争に行かなければならない日が来ました。戦争に行くとちゅう、ゆみ子はいつものように食べ物を「一つだけちょうだい。」といって、全部お父さんの食べ物を食べてしまいました。ぼくはこの部分を読んで、お父さんはやさしいお父さんだなと思いました。ゆみ子のことが、大切で、なんでもあげたかったんだなと感じました。
　この後、もう食べ物はすべてなくなってしまいましたが、お父さんは、まだおなかのすいたゆみ子にコスモスの花をあげました。ぼくは、このお父さんは、ゆみ子のことが大好きなんだなと感じました。お父さんは、この花がゆみ子に何かをあげられる、最後かもしれないと分かっていたのかもと考えました。お父さんはとてもかなしかったかもしれません。
　最後の方では、ゆみ子は食べ物を選ぶことができるだけの日をすごせるようになっていたのが印しょう的でした。今でも世界のどこかで戦争をしていると思うと信じられません。戦争のない世の中になってほしいなと思いました。

## コスモスの花の意味

いその　みなと

　ぼくは、国語のじゅぎょうで、「一つの花」を読みました。一つの花の著者、今西祐行さんは、一九二三年に生まれ、たくさんの名作をのこした人物です。一つの花には、ゆみ子という女の子が、どのように戦争の苦なんをのりこえていくかというのが、この物語のテーマです。ぼくは、この物語を読んで、戦争がどれだけざんこくかを、実かんしました。理由は、ゆみ子みたいな子どもでも、「一つちょうだい」と言うほど、食料が少ないからです。戦後では、「ゆみ子は自分にお父さんがいたのかもしりません。」という文が、とても心がいたみました。
　ゆみ子のお父さんは、ゆみ子がぐずっていたところを、えきのプラットフォームにおいてあった、コスモスの花をわたしていましたが、今の自分にはとてもできません。ゆみ子のお父さんはとてもすてきな人だと思います。
　ぼくは、「コスモスの花」の意味について考えました。作品の中では、戦中にはコスモスの花について、『お父さんは、プラットフォームのはしっぽの、ゴミすて場のようなところに、わすれられたようにさいていたコスモスの花を見つけたのです。』と書かれています。しかし、戦後では、『でも、今、ゆみ子のとんとんぶきの小さな家は、コスモスの花でいっぱいに包まれています。』と書かれています。そ

こから、ぼくは、コスモスは「命」を表していると思います。なぜなら、戦中では、コスモスの花が、ゴミすてばのようなところに、わすれられたようにさいていましたが、戦後では、コスモスの花でいっぱいに包まれていることから、戦後では、命がとても大切になっていると考えるからです。

「一つの花」を読んで、今、ご飯をじゅうぶんに食べてるだけで幸せなんだと思いました。

## なぜわたしは「ごんぎつね」を読んで、もやもやするのか

ジャンビア　咲優里

わたしはごんぎつねを読んで、最後に兵十がごんぎつねをうった場面が一番びっくりと同時に悲しくなりました。

「なぜ！兵十、ごんをうつんだよ！！！」

とさけびたくなりました。

もし兵十が、ごんが松たけやくりを持ってきていたことを知っていたなら、兵十はごんをうたなかっただろうと思います。仲良くなれたかもしれません。

ごんぎつねを読んで、相手の考えや感じょうをわかろうとするのが大切だと学びました。なぜこう思ったかというと、人の考えや感じょうは単じゅんではないと思うからです。たとえば、言わなくても分かるだろうと思う人と、言ってくれないと分からないと思う人では、分かり合うのがむずかしいと思うからです。

わたしも同じようなけいけんがあります。母がばんご飯のじゅんびをしている時、わたしに、はしぐらいならべてほしいと頭の中で思っていました。わたしは何もせずすわっていると、とつぜん、母が、

「はしぐらいならべてよっ！」

とおこってさけびました。わたしはびっくりしました。わたしと母は、ちがう考えを持っていたからそうなったのです。

わたしは、ごんぎつねを読んで、なっとくいかないもやもやした気持ちになりました。兵十はごんがしてくれたことがわからなかったし、ごんは、火なわじゅうをしかけられていることを知らなかったからです。とても残念な気持ちと同時にくやしい気持ちになりました。

わたしは、今後、人の話を良く聞いて、相手の気持ちや考えを理かいできるよう努力しようと思います。

## 後かいしないために

中井　智基

この物語は後かいの話です。後かいした登場人物はきつねのごんと兵十です。一つ目の後かいは、ごんが兵十の大事なうなぎをぬすんだことです。ごんはただいたずらがしたかっただけなのに、兵十の大事なものだとはわかっておらずとても後かいしていました。二つ目の後かいは、兵十がごんをじゅうでうったことです。兵十はごんがうなぎをぬすんでしまったつぐないで毎日くりをあげていたことを知らずにうってしまいました。その後にくりのことを気づいたのでとても後かいしたと思います。ぼくはこのような、「分かっていなくてやってしまった」という後かいをしたくないです。

ぼくは、ごんや兵十と同じようなけいけんをしたことがあります。お母さんがぼくの気持ちを知らずに悪い事と決めつけて、ぼくは怒られたことがあります。いつもおなじようなことをしているから、またしていると思われたと思います。お母さんには「勝手に決めつけないで」と思ったし、自分も「ふだんからちゃんとやらないといけない」と思いました。また、弟が作ったブロックをバラバラにしてかたづけたら、大切な物とは知らずにそうしてしまって泣かせてしまったことがあります。相手の人の事も聞いて、行動しなければならないと思い

ました。
　これからは相手のした事や気持ちを考えて行動して、ふだんから正しい行動をとってうそだと思われないようにして、このような後かいが無いようにしたいです。

## 「ごんぎつね」

えんどう　えま

　印しょうにのこったところは、きつねが兵十にうたれて死んでしまった場面です。わたしは、かなしい気持ちと、かなしくない気持ちがどちらもあります。それは、二人ともわるいことをして、こうかいしていて、そのけっか自分にもわるいことがおきたからです。
　ごんがうたれた後、兵十は、こうかいしたけど、ごんの方がもっとこうかいしていると思いました。わたしも、妹とたくさんけんかをして、二人ともわるいことをして、さいごは、二人ともかなしい気持ちになって、楽しくなくなってしまうことがたくさんあります。
　このお話から学んだことは、本当のことを知らないのに、物ごとを決めつけないということです。これからは、こうかいをたくさんしないように、行動したいと思います。

## ごんと兵十の切ないお話

岩本　陽楠

　わたしが一番印しょうに残った場面は、兵十が「ごんおまいだったのか。いつもくりをくれのは」と言った後に、ごんがなくなる前にうなずいたときです。はじめは、くりをくれたのは神様だと兵十は思いこんでおり、ごんはそれがつまらないと思っていました。火縄じゅうでうたれたしゅん間に、やっとごんの気持ちが兵十に伝わりました。わたしはこのお話を読んでむねが苦しく切ない気持ちになりました。
　もし、このお話に続きがあるのであれば、わたしはごんに死んでほしくありません。必死の兵十のかん病でごんが元気になり、兵十といっしょに幸せにくらすお話にしたいです。ごんが元気になり、兵十といっしょにくりや松たけを取りに行くすがたが、村の人の目に止まり、みんながごんがやさしいきつねだと信用し、かわいがってほしいのです。
　わたしがこのお話から学んだ事は、いたずらをしてしまった後、悪いと気がついたら、まずはみとめる事です。ごんが自分の行動が悪かったとみとめた後に、今度は良い事をじっさいにしようとした行動の変化は、す晴らしいと思いました。わたしは何か悪い事をしてしまったり、相手がいやな気持ちになったら、自分から行動をおこして、自分が変わったすがたを見てもらいたいです。
　今後大切にしたい事は、悪いことをしてしまったら、自分の行動を振り返り、相手がどう思うのか考え、自分の口であやまって、すぐになおしたいです。

## ひとつの言葉では言い表せないごんの話

橋本　勲

　ぼくがごんぎつねを読んで、一番印しょうにのこったのは場面六です。場面六では、ごんはやさしくしていたのに、兵十にうたれてしまいます。この場面を読んで、ぼくはかなしい気持ちになりました。なぜかと言うと、ごんがせっかくいたずらをはんせいしたのに、うたれたからです。ごんはさいしょにいたずらをしたので、あとから親切にしてもまだきらわれていました。兵十がごんをうったあと、本当のこ

とに気づいておどろいたと思います。
　ごんが兵十のおかあさんがうなぎを食べたかったことに気づいて、兵十にうなぎをあげていたら、友だちになれたかも知れなかった、と思いました。ちょっとしたごかいやまちがいで、うたれたり、うってしまったりすることは、ぼくもじっさいに聞いたことがあります。そういったことがないようにするにはどうしたらいいのか考えさせられました。
　自分にとって小さいいたずらでも、いたずらをされた人には重ようなじょうきょうかも知れません。ぎゃくに、小さな親切が親切にされた人にはもっと意味があるときがあるかも知れません。ぼくも、ぼくのおじいさんに買い物の荷物を車から家のなかに運ぶのをよくたのまれます。ぼくにはかんたんなことだけれども、八十才のぼくのおじいさんにはしんどいことだと思います。いたずらでも、親切でも、相手の気もちを考えて行動するのが大切だと気づきました。
　兵十も、火なわじゅうをうつまえによく考えたらハッピーエンドになれたかも、と思いました。

## ごんの死は本当だったのか

宮下　翔琉

　ぼくは、ごんぎつねという物語で印しょうに残った場面があります。それは、第六場面の最後に出てきた「青いけむりが、まだつつ口から細く出ていました。」という言葉です。この言葉を聞いた時に、ぼくはうってしまった後かいで、自然とじゅうを取り落としたのだと思います。それにその場面では時がまるで止まったかのように感じました。
　ごんぎつねという物語では、起しょう転結の内、結末がない物語です。ぼくは、もしごんぎつねの物語に結末があったら、次のようだと思います。
　まず、ごんは兵十がうったたまに当たっておらず、ごんは死んだふりをしました。そのままごんは、兵十におはかに入れられますが、ごんはシダのいっぱいあるところにあなをほって住んできたので、なれていました。そこからまたあなをほって村に戻りました。今度は兵十のところにどうどうとあやまりに行きました。そこで兵十も死んでいなかったことにおどろきました。兵十は急いで村の人に言いました。その後ごんは村のペットとしてかわれました。ごんは毎日のように、兵十や村の人たちからご飯を分け与えてもらえるようになりました。
　このように最初は悲しかったのが、最後はハッピーエンドで終わるようにしました。
　この物語を読んでぼくは、やったことは本人に直せつあやまった方がいいと思いました。なぜならば、こっそりつぐないをしても、本人はだれがやったのか分からないし、伝わらないからです。

## 「ごんぎつね」感想文

岩谷　翔

　ごんが話のさい初の方でいたずら好きだったのを読んで、ごんは悪いやつというせっていで書かれているんだなと思ったら。と中からつぐないをし始めて「あ、いいやつだな」と思って読んでいたら最後に兵十と会って、「どうするんだ?」「にげる?たたかう?それとも?」とそうぞうしながら読んだら、兵十がごんをじゅうでうってしまって、これはどっちが悪いんだろうと思いました。自分としては何とも言えませんでした。なぜかと言うと、いたずらをしていたごんをうつのはよくわかりますが、くりなどをくれていたごんをうってしまったら、ひどい事をした感じになるので何とも言えません。
　もし、ごんがくりをくれていたと知っていたら、うたなかったと思います。本当の事を知る事が大事だと思いました。今後、自分が考え

て、行動にうつすときに生かしていきたいです。

## 「ふみきりペンギン」を読んで

櫻井　紗良

「お前右きき、おれ左きき」と、ゆうとが言ったのは、自分の左ききはかっこいいと思ったからだと思います。

ゆうとは最初みんなにからかわれていました。ペンギンにもからかわれていましたが、五番目のペンギンは「でも、左ききってさ、みんなとちがってて、何かかっこ良くない？」と言ってくれて、ゆうとの気持ちがふわっと軽くなりました。

わたしも同じけいけんをしたことがあるので、ゆうとの気持ちがよく分かります。わたしの手のひらには、ほくろがあります。手のひらにほくろがあるなんてはずかしかったけれど、友達のお母さんが「紗良ちゃん、そのほくろはゆめをつかめるほくろだよ。」と言ってくれて、わたしの気持ちもふわっとなりました。

わたしもお友達の気持ちをふわっとさせるようなあたたかい言葉が言えるようになりたいです。